



ゆく年 くる年

2012年、日本は東日本大震災とそれに続く原発事故への対応というかつてない困難の中で幕を開けました。多くの課題を残しつつも、少しずつ復興への確かな歩みが始まっています。私たち医療を取り巻く動きでは4月に、「社会保障・税一体改革」の確実な実現への第一歩、あるいは「2025年のあるべき医療・介護の姿」を念頭においた診療報酬の改定が行われました。「2025年の姿」は団塊世代が大きな塊で後期高齢者に突入する年であり、人口減少の中での少子超高齢社会、介護を必要とする高齢者単身世帯の増加、そして認知症の増加が予測されています。医療機関にとって、今日置かれている立ち位置を今一度確認し、2025年のあるべき姿の将来像を描きつつ進化し続けるのかという宿題が与えられています。医療提供体制の再編がすすめられるこれから、琵琶湖中央病院もよりいっそう特色ある病院づくりと、医療・看護の「質」の向上が求められています。病院創立30周年の2013年。琵琶湖中央病院は新しいステージを目指します。

さて、今年の夏のオリンピックは私たちに多くの感動を与えてくれました。中でも、女子サッカー、バレーボール、卓球、あるいは水泳、体操、フェンシングと、チームで勝ち取った勝利の数々が印象に残りました。チームとして力を発揮するということのたいせつさは医療の現場も同様です。職員一丸となり、地域の皆さん、患者の皆さんからより信頼される病院づくりをすすめます。ご支援よろしく願いいたします。

最後に今年の顔と聞かれれば、ノーベル生理学・医学賞を受賞された京都大学iPS細胞研究所所長山中伸弥先生。未来への希望を信じつつ新しい年を迎えたいと思います。来年もよろしく願いいたします。



公開研修会に 250名超の参加

12月14日、大津市にあるピアザ淡海大会議室で当院主催の公開研修会が開催されました。この研修会には当院の職員をはじめ、県下のリハビリテーション関係医療従事者250名超が参加しました。開会のあいさつで当院坂口院長はこの研修会を次のように位置づけました。『当院は来年、病院創立30周年を迎え、また「回復期リハビリテーション病棟」は開設5年目の節目を迎えます。本日の研修会は、私どものポジションとミッションを再確認するとともに、当院の提供する医療の核であります「回復期リハビリテーション」に係る現状と課題整理を、チーム医療と連携の観点から、そして2025年を目指す医療提供体制の再編の動きの中での将来展望について、県内の医療関係従事者の皆さんとともに考えさせていただくことを目的として企画いたしました。』

研修会の講師は「回復期リハビリテーション」における日本の第一人者である、回復期リハビリテーション病棟協会会長の石川誠先生。講演は1時間半に及び、リハビリテーション医療、医師をはじめとする医療スタッフそれぞれの役割と協調、患者・家族との信頼関係のたいせつさ、そしてチームアプローチ、地域との連携と、広範囲なテーマを実践論を中心にお話ししていただきました。参加者からの感想です。「初心に帰ることのたいせつさ。日常を流すのではなく、問題意識をもつこと。そして病院も個人も、もっともっと質を高めることが必要と思いました。」

来る2013年は当院にとって病院創立30周年の年となります。新たな次のステージへのスタートの年でもあります。ひとりひとりの職員が今一度身の回りを見つめ直し、病院とともに進化し続けていきます。ご支援をよろしく願います。